

A 語句の意味と読み

- (1) ほとんど～ない・めったに～ない / ★下に打消を伴う陳述の副詞
- (2) 特別に仕立てたのではない、格式ばらない様子
- (3) 風情ありげである・趣がある
- (4) ひとだまい／かざみ／したすだれ
- (5) しゃくにさわる・くやしい / ×「ねたましい（うらやましい）」だけではない
- (6) 目立たないように、わざと質素にすること

B 文法

- (7) どちらも尊敬語／作者から葵の上への敬意
- (8) 打消の助動詞「ず」の連用形（補助活用「ざり」）／終止形は「ず」
- (9) 「む」＝婉曲の助動詞「む」の連体形／「め」＝推量の助動詞「む」の已然形。係助詞「こそ」を受けて已然形「め」で結ばれている（係り結び）。
- (10) 使役の助動詞「さす」の連体形／～させる

(11) 完了の助動詞「つ」の已然形 / 「立ちわたりたる」の「たり」（存続）と区別する

(12) 受身の助動詞「らる」の連用形／受身 / ★尊敬・自発・可能ではない

C 誰の・何のことか

- (13) 六条御息所。身分を隠して、人目を忍んで見物に来ていたから。
- (14) 六条御息所側の供の者たち
- (15) 行列が見えなくなってしまったこと（それはそれとして、の意）

D 口語訳

- (16) 大殿（葵の上のお邸）では、このようなお出かけもめったになさらないうえに、
- (17) ひとりひとりで（こっそり）ご覧になるようなのは、見えがしないでしょう。
- (18) これは、決して、そのように押しのけたりしてよいお車ではない。
- (19) （六条御息所の車は）お供の車の奥に押しやられて、何も見えない。

E 内容・記述（解答例）

(20) ①若い女房たちが「ひとりひとりで見るのは見ばえがしない」とすすめたこと。②（もともと）気分がすぐれず出かける気はなかったが、周囲にうながされたこと。

(21) 正体を知られたこと。「心やましきをばさるものにて（それはそれとして）」と、見えないことは二の次に置いたうえで、知られたことを「いみじうねたきこと、限りなし」と最上級に言っているから。

(22) 身分を隠して忍んで来ていたのに、正妻である葵の上の側にそれと見破られ、車を押しのけられて奥に追いやられるという屈辱を受けた点。

(23) 御息所の恨みが生霊（物の怪）となって葵の上を苦しめ、葵の上は出産後に世を去ることになる。

F 文学史

(24) 紫式部／平安時代

(25) 作り物語

(26) 葵の上

【現代語訳（全文）】

大殿（葵の上のお邸）では、このようなお出かけもめったになさらないうえに、ご気分までもすぐれなかったので、（見物に行くことを）お考えにもならなかったが、若い女房たちが「いやもう、ひとりひとりで（こっそり）ご覧になるようなのは、見ばえがしないでしょう」などと言って、（葵の上は）お出かけになる。

日が高くなってから、格式ばらない様子でお出ましになった。すきまもなく車が立ち並んでいるところに、りっぱな女房車が多くて、身分の低い者のいない場所を選び定めて、（供の者が）皆（先客の車を）押しのけさせる中に、網代車で少し使い古したのが、下簾の様子などが風情ありげで、（乗っている人は）奥深く引き入って、かすかに見える袖口・裳の裾・汗衫など、色合いがたいそう美しく、わざと目立たないようにしている様子をはっきり分かる車が、二台あった。

「これは、決して、そのように押しのけたりしてよいお車ではない」と、（供の者が）強気に言い張って、手を触れさせない。

……とうとう（大殿の）お車を次々と立て並べてしまったので、（御息所の車は）お供の車の奥に押しやられて、何も見えない。

（行列が見えず）不愉快なのはそれはそれとして、このように忍んで来ているのを「あの人だ」と気づかれてしまったのが、たいそうしゃくにさわることこの上ない。